

全国 48 都道府県踏破!! 第 1 次ミッション完了(2005-2006)

相田満^{†1}

当時の SIG-CH では、運営の第一目標として、日本全国踏破をすること、すなわち 47 都道府県すべてでの開催を実現させるということが達成目標となっていた。

We traveled across 48 all prefectures across the country. --The first missions completion.(2005-2006)--

MITSURU AIDA^{†1}

In then SIG-CH, it became the target to make all over Japan travelling on foot as the first aim of the administration namely to realize the holding with all 47 metropolis and districts.

1. はじめに

「じんもんこん」の見出しで立てられるウィキペディアの記事が再稼働したようだ。それによれば、私が主査を務めたのは第 8 代目にあたるとのこと。

当時は国文学研究資料館では研究情報部データベース室の助手にあったが、助手でしかも文系の立場にいる者が主査に立つなど、歴代主査を見渡しても初めてのことで、しかも任期最終年度は科研を持たない端境期の状態で旅費の捻出に旧幹事の原先生の手を煩せたりなど、今から思えば綱渡りのような運営だったが、歴代主査・幹事・連絡員の方々のサポートを受けながら何とか責を果たすことができた。

2. 運営の第一目標

当時開催される SIG-CH では、運営目標の一つに、日本全国踏破をすること、すなわち 47 都道府県すべてでの開催を実現させるということがミッションとして与えられていた。第 2 代主査・及川昭文先生の口伝である。

いやな予感是一直していたのだが、案の定、私が主査を引き受けた頃には、それが運営の第一目標となる時がやってきた。

主査を担当していた時代に開催した会場で苦労したのは富山県と栃木県だったが、それぞれ苦労があった分だけ思い出深い会場となった。

まず富山県では、通例だと地方会場は冬期に開催されることが多かったのだが、雪に見舞われる危険性もあるので、2005 年度は 10 月に富山県に変更した。そして、1999 年 3

月まで国文学研究資料館の機関研究員を務めていた田中夏陽子（現高岡万葉歴史館主任研究員）氏を頼って、「高岡万葉歴史館」を会場をお願いし 10 月 28 日に、懇親会では高岡の地産素材がふんだんに使われ料理による手厚いおもてなしを受けた。

実は万葉歴史館自体には、CH どころか情報処理学会自体の会員もないのだが、そういう所では、親学会の、「会員 2 万人を擁する」情報処理学会に属する研究会というお題目が、結構効果的に働いたことが再三再四だったが、これも例外ではなかった。

一番苦労したのが栃木県である。前年度 11 月に事務局へ提出した計画書を引っ張り出してみると、資料 1 にあるように、すでに日本一周達成記念行事が既定の事実のように計画書には織り込まれていたかのように書いてあった。

資料 1 平成 18 年度 (2006) 活動計画書より

研究発表会日程計画

◎日時：平成 18 年 5 月 26 日（金）9：30-17：00

会場：大阪市立大学[予定]（有料）

参加予想：50

備考（特集、共催等の情報）：

◎日時：平成 18 年 7 月 28 日（金）10：00-17：00

会場：未定[栃木]（有料）

参加予想：40

備考（特集、共催等の情報）：

◎日時：平成 18 年 10 月 27 日（金）10：00-17：00

会場：青森高専（有料）

参加予想：40

備考（特集、共催等の情報）：

◎日時：平成 19 年 1 月 26 日（木）～27 日（金） :- :

会場：総合研究大学院大学[予定]（有料）

参加予想：70

備考（特集、共催等の情報）：テーマ CH 日本

†1 第 8 代主査／国文学研究資料館・総合研究大学院大学
8th Chief /National Institute of Japanese Literature, The Graduate
University for Advanced Studies

†1 第 8 代主査／国文学研究資料館・総合研究大学院大学
8th Chief /National Institute of Japanese Literature, The Graduate
University for Advanced Studies

一周達成記念 CH の歩みと未来

会場選定は難航した。以前集中講義に行った某国立大学の伝手は転任しており、知り合いの勤務先の某短大の付置施設は、当該年度に限って改装中という間合いの悪さで、やっと思いついたのが、真夏のゴルフ施設ならば、宿泊施設くらいあるのではというアイデアであった。一部OBからは温泉でという声も聞こえてきており、生真面目に要望に応える義理はないが、ダメモトでアプローチしてみたら、案の定、ゴルフ場は閑散期にあたっていて、氏家（喜連川）温泉付き、シングル個室対応のゴルフ場内ホテルでの開催が、一人懇親会付1泊2日で送迎付き・懇親会込みで1人1万円以内で収めることができた。

私が担当した頃から、具体的には、堂に入った踊りっぷりとはどのようなものか、民謡の踊りの解析を通じて舞踊に関わる活発な議論が起り、このころからモーションキャプチャの発表を通じて、人文情報学の発表が質的に変わってきたのを感じた。

3. CH日本一周達成記念シンポジウム

任期中の実際の例会・じんもんこんシンポジウムの開催状況は、資料2の通りである。

資料2 2005～2006年度の例会・じんもんこん実施会場

- ◎2007年1月26日(金), 27日(土) 総合研究大学院大学 (神奈川県三浦郡葉山町)
- ◎2006年12月14日(木), 15日(金) シンポジウム「じんもんこん(-)2006」 同志社大学今出川キャンパス(京都市)
- ◎2006年10月27日(金) 八戸工業高等専門学校(青森県八戸市)
- ◎2006年7月28日(金) ホテル・ベルセルバ(栃木県さくら市)
- ◎2006年5月26日(金) 大阪市立大学(大阪市)
- ◎2006年1月27日(金) 国立教育政策研究所目黒庁舎(東京都目黒区)
- ◎2005年10月28日(金) 高岡市万葉歴史館(富山県高岡市)
- ◎2005年12月16日(金), 17日(土) シンポジウム「じんもんこん(-)2005」 東京大学大学院鉄門記念講堂ほか(東京都文京区)
- ◎2005年7月29日(金) 山梨大学(山梨県甲府市)
- ◎2005年5月27日(金) 花園大学(京都市)

当時の幹事は鈴木卓治・曾我麻佐子・師茂樹の3氏。本務校の業務とともに幹事の重責をこなしながらも、積極的

な発表をこなして下さっただけでなく、各回研究会への出席率も非常に高く、ずいぶんと助けていただいたことをありがたく、今も感謝している。特に、鈴木卓治氏は、第9代主査に任じられ、初の海外での例会開催(台湾)に尽力されることになったが、その折にはたいそう苦勞をおかけしたと拝察する。

そして、最も印象深かったのは、総合研究大学院大学を会場に2日間にわたって開かれた記念シンポジウム「CH日本一周達成記念 CH の歩みと未来」である。この時にも歴代主査が一文を寄せて記念文集を及川先生が作製された。

今回の100周年の記念すべき会においても同様の試みがなされるという。前回の記念日に次ぐ、新たな旅立ちの日に坂できない事は大変申し訳なく、残念に思う。

前回のシンポジウムの折に、及川先生に表彰状が手渡されたのだが、その文章があまりに振るっておもしろいだったのが印象的である。何しろ、プレゼンターを務めた私が壇上で吹き出してしまい、全文を読み上げる事ができなかったのだから、とんでもない恥をかいたものである。表彰状の授与は、鈴木氏に途中交代で代読してもらい、無事に授与の儀式を終える事ができたが、会場の参加の方々が妙に神妙な顔をしていたのが印象的だった。後で聞いてみると、初めは私が感極まって涙ぐんだと思っていたとの事。機会があればその文章をもう一度目にしたいものだ。

及川先生、お願いします。

4. ちょっと昔からのメッセージ

最後に、「日本一周達成記念」の折に壇上に立って話をした折のパワーポイントが出てきた。今となっては旧聞に属する所も多々あるが、その当時でしか言えないことながら、今でも通じる所もあるようである。そこで、あえて、ここで再掲して稿を終えたい。

今日からはじまる”じんもんこん”

過去・**現在**・未来

CH72主査(2005-2006年度)

相田 満

[国文学研究資料館]

2007年1月26日(金) 於: 総合研究大学院大学

1

CONTENTS

- 現状認識
 - 冬の時代
 - 失われた10年は多様な時代ではなかったか
- CH誕生の頃と今
 - 文系出身の主査
 - 構築系

2

現状認識

- 冬の時代①
 - 人文科学とコンピュータ 2003年4月終刊
 - SCIENCE of HUMANITY BENSEI 42
 - 日本列島の人類学的多様性[最終号特集名]
 - ASAHI パソコン 休刊 1994.4-2006.3
 - 月刊アスキー 2006.8号でパソコン誌卒業
- 冬の時代②
 - 古典離れ? 古典学者と情報学者との距離広がる
 - 関心は高い
 - アプリケーションソフトの淘汰・寡占化
 - プラットフォーム共通化・ボーダレス化の一方で集中化
- 失われた10年は多様な時代ではなかったか

3

CH誕生の頃と今

杉田繁治「人文科学とコンピュータ」1989.5.19 CH1-1の頃との比較

- 人文系からの発想
 - 総合百貨店型
 - 現場感覚:
 - 人文科学におけるコンピュータ利用の特徴
 - 個人発表者の減少(人文系発表者の増加を)
 - データを作る時代は終わったか?
 - 人文系コンピュータシステムの環境整備
 - マルチメディアシステム
 - 利用の実態調査
 - 多種文字の入出力・コード体系(→徹底した実態調査が必要な時代に)
 - 自然な入力
 - シソーラス(→オントロジ)
 - 著作権(→厳密化)
- データの中味が見えない発表がふえてきたのでは
- 私にも出来るかもしれないという事例の紹介への配慮

4